

知っていますか？  
この言葉

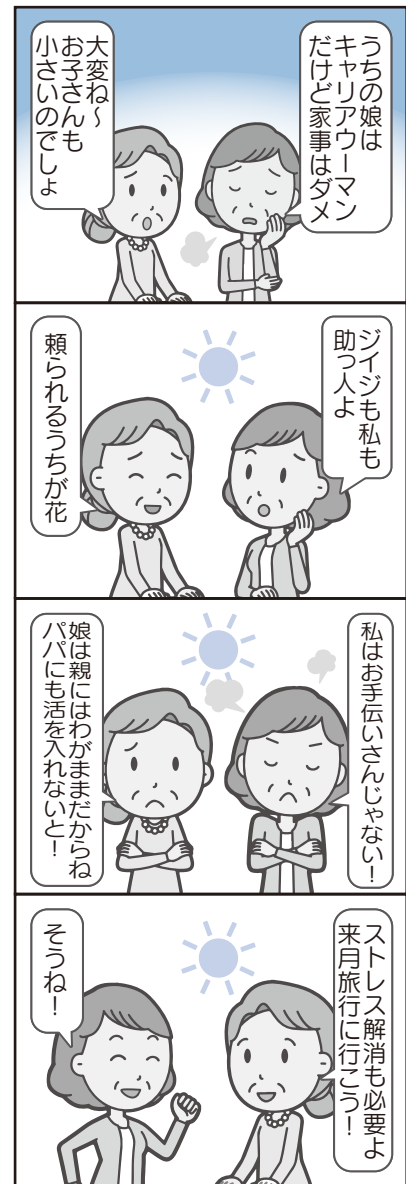
アンコンシャス・バイアス  
(unconscious bias)

日本語では「無意識の偏見・思い込み」と訳されます。自分自身が気づいていない、ものの見方や捉え方のゆがみ・かたよりを表します。実は誰もが何らかのアンコンシャス・バイアスを持っており、それ自体が直ちに悪影響を与えるわけではありません。

例えば「男性は運転がうまい」「若い人は発想が新鮮」「シニアはパソコンが苦手」といった固定観念もその一例と言えるでしょう。運転が上手な女性もいれば、高齢でもパソコンに強い人や発想に柔軟な人もいるはずです。性別や年齢などの偏見にとらわれたまま、せっかくの可能性を排除してしまっていることもあります。特に企業にとってその弊害は極めて大きいといえます。多様な価値観やライフスタイルを持った人が働く職場では、先入観や固定観念が判断にゆがみを与え、適切な意思決定の妨げになりかねないと問題視されています。「女性は家庭に入れ」「家事や子育ては女性がやるもの」といった、昔の役割分担を引きずっている人も多く見られます。男性と肩を並べて頑張る、社会で働く女性がいると敵対視したり、ねたみ、嫉妬からハラスメントに発展するなどがあります。これは女性、男性に限りません。

最近では、ディスカッションやロールプレイングを通じて、アンコンシャス・バイアスをなくすためのトレーニングを研修に取り入れる企業も出てきています。世界的企業の『グーグル』は、「社員が偏見を理解し多様な視点を持つ行動ができる」「企業文化を変える」等のために、2013年5月から社内教育活動を開始しました。現在では全世界で2万人以上の社員がそのトレーニングを受けているそうです。日本でもこの言葉が認知され、各人が自分の能力を十分に発揮できる世の中になるといいですね。

イクジィ・イクバァはあたふた



コ  
ウ  
ム



昨年一年間の性的暴行件数は二万件を超えました。これは十年前の1.5倍です。性犯罪の被害者は女性では幼女から七十歳代まで幅広く、男性の被害者もいます。望まない性交に抵抗できなかった場合も多いようです。また女性の場合は、妊娠のリスクが伴います。小中学生の妊娠も年間四百件もあるそうです。

被害者に対する世間の偏見も多く、事件のストレスで精神が不安定になったり、自殺を考えたりする人も少なくないようです。また性犯罪は時には生命に及ぶ人権を無視した暴力行為でもあるのです。

先日、国際政治学者の三浦瑠麗氏がテレビの番組で自伝本の中にある性的被害を受けたことについて語りました。十四歳の時に複数の男たちから性的被害をうけて、悩んだことを告白しました。彼女は母親や後の夫となる恋人の言葉で立ち直ったそうです。

性被害を受けた女性たちがSNSでつながり「MeToo（私も）」と世界的なセクハラ告発運動へと発展しました。性暴力の被害者に非はありません。一人で悩まずに勇気をもって相談、告発してほしいと思います。